

初期鉄器時代後期におけるミケーネの聖地化

高橋 裕子

Mycenae as a sacred place in the Late period of Early Iron Age

TAKAHASHI Yuko

At Mycenae, Argolid in Greece, several small sanctuaries were founded in the late period of the Early Iron Age. This paper reviews the material remains of these sanctuaries and contextualizes them with the other data of Mycenae.

はじめに

ギリシアの初期鉄器時代研究において、アルゴリスのミケーネが重要な研究対象として取り上げられることは必ずしも多いとは言えない。というのもこの集落はミケーネ文化の崩壊後は勢力を減退させ、初期鉄器時代に関しては遺構も遺物も質量ともにミケーネ時代の比ではないからである。初期鉄器時代の中心的な資料である墓の数から推測される集落規模は地域の中で中心的な地位を獲得しうるようなものではなく¹、繁栄していたとは表現し得ない。

ところがそれにもかかわらず、聖域だけは豊富に発見されている。一般に初期鉄器時代に関しては宗教施設は必ずしも多くは確認されていない中で、ミケーネのような弱小集落としては異例の数が出土している。長らくこの遺跡を発掘していたE・フレンチもミケーネに関する概説書の中で、居住関連資料と比べると当該期の聖域の数は驚くべきものであると記している²。そこで本稿においては規模の小さいミケーネの集落になぜ幾つもの宗教施設が造られるようになったのかという問題を取り上げたい。

以下、第1章にて資料掌握を行ったあと、第2章にてそれらについて検討を試みる。

第1章 初期鉄器時代のみケーネにおける宗教施設（図1）

本章においてはみケーネの集落で発見されている初期鉄器時代の宗教施設について資料掌握を行っていく。その際みケーネ時代の城壁で囲まれた城塞内部とその外部とに分けて記載していくこととする。

なおみケーネ時代に関しては、城塞西部に位置するカルト・センター³などの宗教施設が発見されている⁴。しかしそれらは初期鉄器時代まで継続して使用されることはなかったため、本稿の検討対象に含まれることはない。

（1）城塞内部の宗教施設

城塞内部の宗教施設としてはアクロポリスの頂上部に建造された神殿がある。19世紀から20世紀前半にかけて発掘されたが、長年にわたって詳細な調査報告が発表されないままだった。それが解消されたのは1997年であり、かつての調査記録の公開をかねた論文が発表されたことにより本格的に議論が可能となった。

この神殿の場所はみケーネ時代のメガロンがあった一帯であり、現在でもヘレニズム時代の遺構の一部が残されている（図2）。またそれ以前には、前古典期に建立された別の神殿が存在した。この前古典期の神殿に関しては、使用されていた石材などは発見されているが、大きさや平面プランなどを確認することは不可能である⁵。

さらにアクロポリス頂上部における宗教行為は前古典期よりも古く遡ることが確認されており、初期鉄器時代の遺物が出土している。資料数が顕著に増加する後期幾何学文様期に関しては、この場所で既に宗教活動が行われていたと見なすことが妥当である。そのみならず北テラスからは原幾何学文様期や初期幾何学文様期の土器片が発見されており注目されるが、ただしそれらは後期幾何学文様期の層位から出土したと考えられているため、おそらくは原幾何学文様期や初期幾何学文様期の墓が破壊されて混入した可能性などが推察されよう⁶。したがってアクロポリスの頂上部において宗教活動が開始されたのは初期鉄器時代の遅い時期と判断される⁷。

その後、後期幾何学文様期以降のいずれかの時点でテラスの整備が始まり、そして前古典期の間に神殿が建立された。その神殿の最初の瓦に関してはコリントス地方との関係がうかがわれると推測されている⁸。この前古典期の神殿はおそらく前5世紀にアルゴスにより破壊され、その後ヘレニズム時代に新たな神殿が建造された⁹。

信仰の対象に関してはアテナやヘラという意見が提出されており、ヘラを支

持する研究者が多い¹⁰。ただしいずれも後代の資料をもとに提示された見解であり、初期鉄器時代においても同様であったか否かは明らかではない。

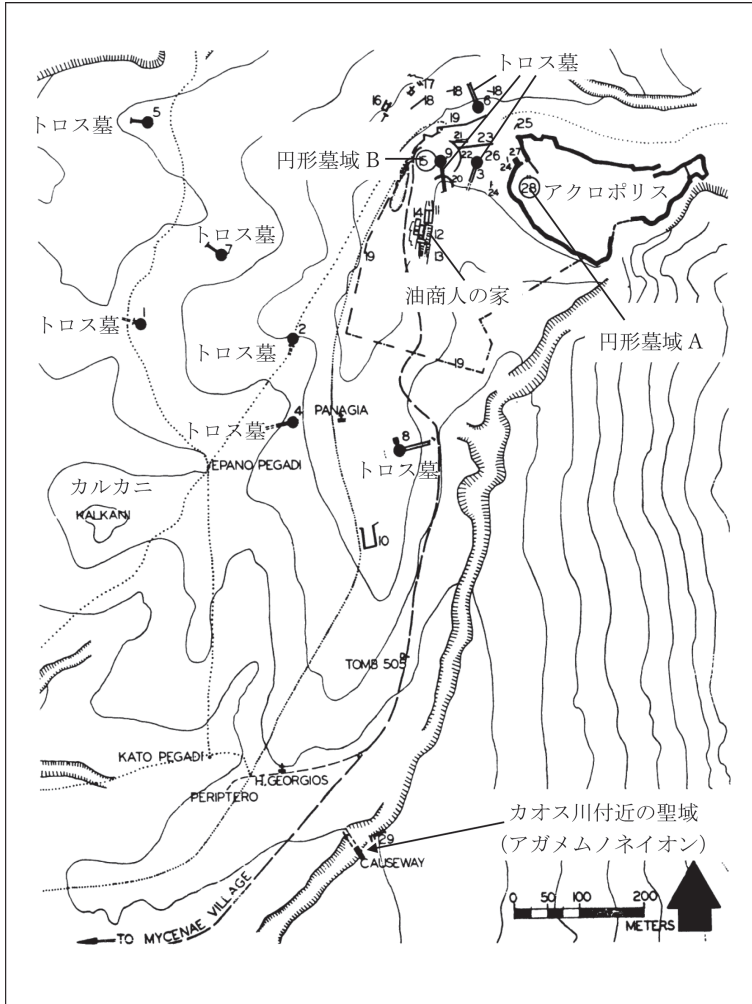


図1 ミケーネ一帯の地図 (Tournavitou 1995, XX の地図を基に筆者作成。エニュアリオス (アレス) の聖域とクツンペラの聖域はこの地図の範囲よりもさらに北方に所在。また横穴墓は各所に分布しており、例えばカルカニは大規模な横穴墓群の出土地。)

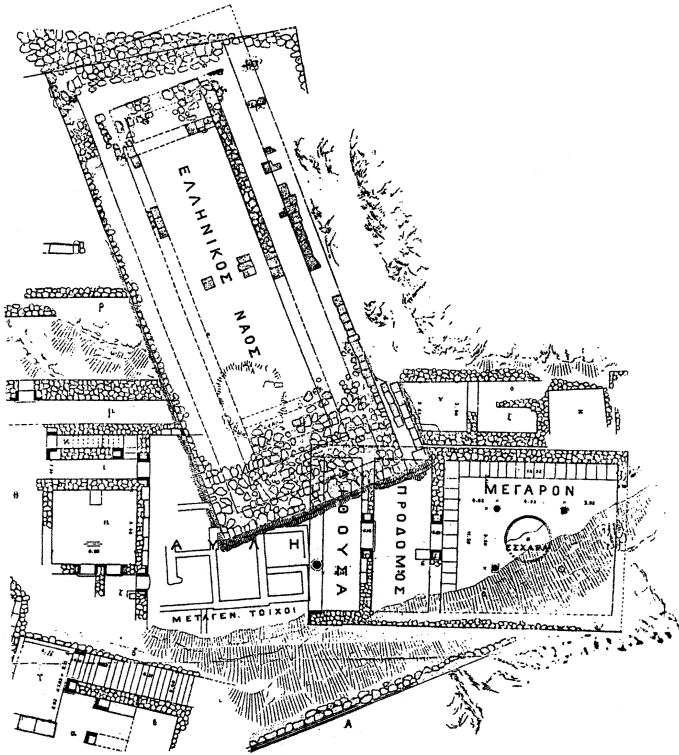


図2 ミケーネのアクロポリスの神殿（出典：Klein 1997, 251, fig.2）

（2）城塞外部の宗教施設

次に城壁外の宗教施設について、北から南の方向へと下る順番で紹介していきたい。

①エニュアリオス（アレス）の聖域

ミケーネのアクロポリスから1 kmほど北方のアスプロホマに所在する聖域で、コリントス方面へと向かうミケーネ時代の道から200mほど西側に離れた場所に位置している¹¹。1960年代に発掘されたが概報しか発表されておらず、未だ詳細は不明である¹²。

神殿やそれに付随する施設が発見されており¹³、中には後期幾何学文様期に

まで遡る可能性がある祭壇も含まれている。また灰や焼成を受けた動物の骨と一緒に後期幾何学文様期の土器片が発見されており、当該期に動物犠牲を伴う宗教儀式が催されていたことは明らかである¹⁴。信仰の対象としては後代の資料からエニユアリオスを祀った聖域とされているが、後期幾何学文様期においてもそうであったか否かは不明である。

②クツンベラ（Koutsoumbela）の聖域

幾何学文様期の小規模な祭壇が発掘されているが、管見の限り未だ詳細な報告は公表されていない¹⁵。場所は現代の道路の近くであり、それはミケーネ時代にも使用された道である可能性が指摘されている¹⁶。

③油商人の家東方の聖域

油商人の家（House of the Oil Merchant）は西方家屋群（West House Group）または象牙の家（Ivory Houses）と呼ばれている建造物群の一角を占める建物である（図1）。1950年代から1960年代にかけて発掘が行われ、線文字Bの粘土板を含めたミケーネ時代の重要な資料が出土したことで著名な遺構である¹⁷。また古代の道がすぐ近くから発見されている¹⁸。

この油商人の家の東方から馬蹄形の建造物が発見され、それが幾何学文様期の宗教施設として報告された¹⁹（図3）。遺構の大半は後代に破壊されているがおおよそのことは把握でき、大きさは長さ9m、幅3.50m、主軸方位は北—南方向、そして複数の部屋から構成されている。発掘報告にて公表された図面では南端部が壁で封鎖されていたが、初期鉄器時代の建築遺構に関する著作を出版したA.マザラキス・アイニアンはそれに異を唱え、別の復元予想図を発表している（図4）。

以下、この建造物に関して問題となる幾つかの点について見ていくことにしよう。

・建造年代

馬蹄形の建物の建造年代に関しては初期鉄器時代に建てられたというところまでは諸家の見解が一致しており、出土遺物や建造物の形態から考えてその判断には問題がない²⁰。

しかし初期鉄器時代のいつかという点に関して結論を出すことは、必ずしも容易ではない。というのもこの場所からは幾何学文様期の資料のみならず原幾何学文様期の土器片が2個出土しているため、それらの内どちらの時期に建造

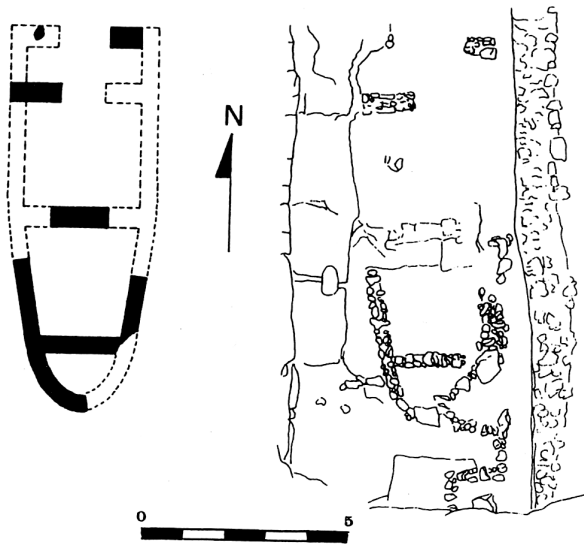


図3 油商人の家東方の聖域

(左：復元予想プラン、右：平面図、出典：Mazarakis Ainian 1997, fig.203a-b)

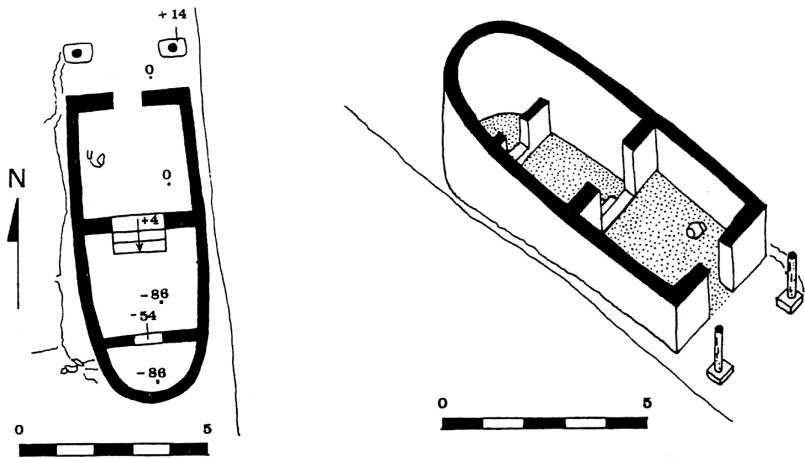


図4 油商人の家東方の聖域に関するマザラキス・アイニアンに関する復元予想図

(出典：Mazarakis Ainian1997, fig.204 (左)、fig.202 (右))

されたのが議論の対象となるからである。初期鉄器時代の前半期に該当する原幾何学文様期とその後半期に属する幾何学文様期とでは全般的に資料傾向が異なり、社会状況にも違いがある。原幾何学文様期は大型建造物も宗教資料も希少な時期であるため、もしもこの建物の建造年代がその時期である場合には稀有な事例となる。

発掘を担当したN.ヴェルデリスは当初原幾何学文様期に建造された神殿の可能性を示唆していたが²¹、その後は幾何学文様期と記しており意見を変更したと見なし得よう²²。筆者は土器片2個を根拠として原幾何学文様期に建てられたと判断することには躊躇を覚えており、またこの一帯が初期鉄器時代には埋葬のために使用されていたことを考慮する必要があると考えている²³。なぜならば、アクロポリス頂上部の神殿一帯に関して記したと同様に、原幾何学文様期の墓が破壊され副葬品であった土器の破片が混入した可能性が否定できないからである²⁴。とするとやはりある程度の数の土器片が出土している幾何学文様期に造られたと判断する方が妥当であろう。

・宗教施設としての起源

この建物の出土遺物の中には、一般に聖域において発見されることが多いミニチュア土器や前古典期の土製像が含まれているため、少なくとも前古典期以降に関しては宗教施設であったことに疑念の余地はない。それでは建てられた当初から宗教施設であったのかというと、おそらくはそうであったと判断される。というのもR.ヘイグが指摘しているように、孤立した状態で設営されていることや²⁵、さらに道沿いであることも含めて、ミケーネにおけるこの時期の他の聖域と類似する特性を有しているからである。また現在に至るまで概報による限られた情報しか存在しないが、日常生活を送るための住居であったことを示唆する資料は報告されていない。これらの点から幾何学文様期に建造された時から宗教施設であったと考えるほうが妥当である。

・信仰の対象

この聖域における信仰の対象に関しては資料がない。発掘報告では神殿という言葉が使用されており神に対する宗教施設と解釈されていることがうかがわれるが²⁶、マザラキス・アイニアンは周辺から初期鉄器時代の墓が出土しているためクトーン信仰ないしは死者崇拜という意見を提出している²⁷。しかし氏の仮説にも確実な根拠があるわけではなく、この建物における信仰の対象は不明と言わざるを得ない。

④カオス川付近の聖域（通称アガメムノネイオン）

ミケーネのアクロポリスから1 kmほど南下した場所にあり、カオス川の左岸に所在する聖域である²⁸（図1）。ミケーネ時代の橋から30mほど離れた場所で、地元ではアギオス・イオアニスと呼ばれている地区に該当する。1950年8月に発掘され、さらに1952年に補足調査が行われた結果、この場所が後期幾何学文様期からヘレニズム時代に至る聖域であったことが明らかとなった。初期鉄器時代の遅い時期にこの場所における宗教活動が開始され、前古典期に関しては大量の奉納品が発見されている。それが前5世紀初めまで継続されたがそれ以降遺物量は減少し、再びヘレニズム時代に入って興隆していった²⁹。

以下、この聖域の問題点について検討していく。

・信仰の対象

信仰の対象に関しては伝説上のミケーネ王であるアガメムノンではないかと推測されており、そのために発掘報告においてはアガメムノネイオンという名称で紹介された。その根拠は出土遺物の中に文字が刻された土器片が数個含まれており、その中にアガメムノンという名前が復元されるものが存在したからである³⁰。しかしその資料の年代から考えてアガメムノンへの信仰が確認されるのは前4世紀もしくはヘレニズム時代以降であり、それ以前の信仰の対象は必ずしも明らかではない³¹。

・建造物

遺構が発見されており、瓦が出土していることから後代には少なくとも一部は屋根がある建造物が存在したことが明らかとなっている³²。さらに後期幾何学文様期に既に建物があった可能性を記す研究者も存在するが³³、推測の域を出ない。初期鉄器時代に関する確実な資料は土器片のみである。

・初期鉄器時代の様相

初期鉄器時代に関する唯一の資料である土器を手がかりとして、この場所が既にその時期に聖域であったのか否か検討しよう³⁴。

注目すべきことに幾何学文様期として報告されている土器の器形は、高脚のクラテル（Pedestal-krater）と小型のクラテル（Krateriskos）の二種類のみである。主流は高脚のクラテル（図5）で60個前後の土器片が発見されており、遺物の番号としてはno.1～30となっていることから30個体が判別されたと推察される。大半は最大径が40～60cm前後であるが、中には75cm以上という大型のものも含まれていた。文様は幾何学文様が中心であるが、人間や馬、鳥のような図柄が描かれたものも出土している（図6）。一方小型のクラテルに関し

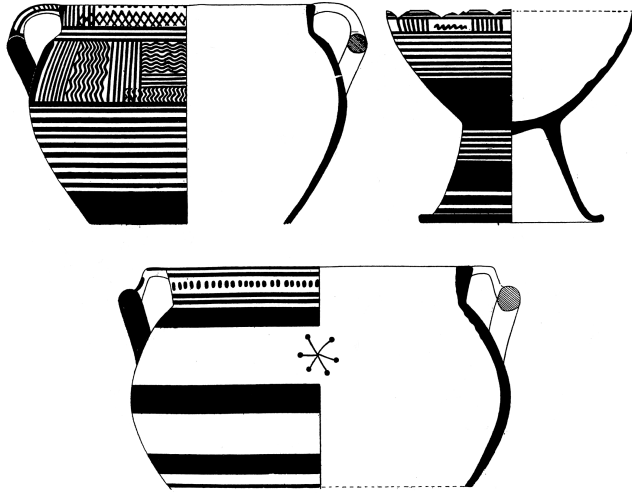


図5 カオス川付近の聖域（アガメムノネイオン）出土のクラテル
（出典：Wace, Woodhead, Cook & Hood 1953, 35, fig.8）



図6 カオス川付近の聖域（アガメムノネイオン）出土の土器片
（出典：Wace, Woodhead, Cook & Hood 1953, 37, fig.10, A4）

ては20個前後の破片が発見され、遺物番号としてはno.31～34となっているので4個の個体が確認されたということであろう。このタイプの土器は前7世紀に入ってから登場すると考えられており、初期鉄器時代というよりは前古典期に分類される³⁵。したがって現今の公表資料に基づく限り、初期鉄器時代の土器は高脚のクラテル一種のみであった³⁶。

特定の器形の土器のみが出土しているということは後期幾何学文様期のこの場所が生活の場ではなかったことを示唆しており、また墓の副葬品としても妥当ではない。さらに中型から大型にかけての土器がほとんどであったことを考えると特別な空間であったことに疑念の余地はなく、聖域であったと結論される。

この場所は後期青銅器時代に使用されていたことが確認されているが、初期鉄器時代に入ってからしばらくの間は放置されていた³⁷。そして後期幾何学文様期になって聖域として使用されるようになり、それ以降ミケーネの聖域の中では主要な存在になっていく。当該期の信仰の対象に関しては上記のように不明であり、後代と同様にアガメムノンであったのか否かは確認できないが³⁸、この聖域はミケーネの集落における後期幾何学文様期以降の特性を考える上で重要な資料である。

上記がミケーネの城塞外部における宗教施設であり、そしてそれらには下記
の共通点がある。

- 1) 初期鉄器時代の終わりごろに誕生した。
- 2) ミケーネの集落のアクロポリスの近辺もしくはそれからあまり離れていない場所に位置している。
- 3) 道沿いまたは道路から比較的近い距離にある。
- 4) 規模は大きくなく、後代においても大神殿や大聖域には発展しなかった。

本章での資料掌握を踏まえて、次章においては若干の検討を試みたい。

第2章 ミケーネの聖地化

初期鉄器時代のミケーネにおいて宗教活動が確認されるようになるのは、後期幾何学文様期に入ってからである。そしてその頃ミケーネ一帯で最も活況を呈していた聖域は、おそらくカオス川付近のアガメムノネイオン（第1章（2）④）であろう。また幾何学文様期に既に建造物が建てられていた信仰の場は、

油商人の家東方の聖域（第1章（2）③）であった。すなわちミケーネにおいてはアクロポリス頂上部よりも、その周辺の道沿いの聖域の方が先に発展し、また整備されたと判断される。これはポリス成立期におけるミケーネの宗教的要素における大きな特徴である。それではなぜ道沿いに幾つもの聖域が造られたのであろうか。

それと関係があると筆者が考えているのが、ミケーネ時代のトロス墓と横穴墓の存在である。ミケーネのアクロポリス周辺には9基のトロス墓と250基を超える横穴墓が分布しており³⁹、中には幾何学文様期など後代の土器が出土しているものもある。それらは偉大な祖先ないしは英雄に対する信仰の痕跡と推測されており、アントナッチオが使用した墓所祭祀（tomb cult）という用語で表現されることが多い⁴⁰。これは他の地域や遺跡においても確認される現象であるが⁴¹、ミケーネはその最も重要な場所の一つである。

さらに円形墓域Bの南方で発掘された崩壊した横穴墓の上からは、円形の遺構が発見されている。小型の石で構築されており、幾何学文様期や前古典期の土器片、動物の骨などが出土した⁴²。管見の限り遺物は公表されていないが、一般に幾何学文様期の宗教関連の設備と見なされることが多い⁴³。

これらの資料はミケーネ時代の埋葬施設が、初期鉄器時代の後期以降は信仰や崇拝の対象となったことを示唆している。上記の通り墓所祭祀をはじめかかる現象はミケーネ以外のギリシア各地でも発見されているが、しかしミケーネの場合はトロス墓にせよ横穴墓にせよ他集落と比べると圧倒的に数が多い。ミケーネ一帯の多数の墓が信仰の対象とされたことにより、ミケーネという地域全体が聖なる場所、すなわち聖地と見なされるようになったのではないか。そしてその結果、ミケーネ一帯の道沿いに幾つもの聖域が造られたのではないか⁴⁴。

さらに指摘しておきたい点が、初期鉄器時代以降はミケーネが集落として大規模に発展しなかったことである。本稿冒頭においても記したように、ミケーネ文化の崩壊以降のミケーネは往時の繁栄ぶりは見る影もない弱小集落へと転落し、かつての勢力を取り戻すことは二度と能わなかった。さして繁栄しているわけでもない集落に古のトロス墓や横穴墓があまたある光景は、当時の人々にとっては奇異であると同時に何か特別な場所と感じさせる要因となったであろう。おそらくはこのようなことによりミケーネ一帯が聖なる場所と見なされるようになったと筆者は考えている⁴⁵。

またこれらの聖域がその後も大聖域や大神殿へと発展することがなかったこ

とは、公的に管理された神殿とは性格を異にする宗教施設であった可能性が高い。さらにミケーネはアルゴリスとコリントス地方とを結ぶルートの一環に位置していることを考慮するならば、これらの聖域を訪れた人々の中にはミケーネの集落の居住者以外に街道を行き来する人々も含まれていたであろう。

これに対してアクロポリスの頂上部における宗教行為は道路沿いの聖域とは異なり、その立地から判断して集落の聖域という公的性格を有していたであろう。それだからこそ神殿が建立されるという方向へと発展していったと判断される⁴⁶。

おわりに

初期鉄器時代の後期は政治的にも社会的にも大きな変化があったと見なされている時期であるが、それは宗教的側面においても同様であった。最も顕著なことは神殿の建造が開始されたことであり、それはポリスの成立と関連付けて論じられることが多い。ただしこの頃の宗教や信仰およびその儀式の在り方は必ずしも一様ではなく、例えばアシネでは城壁の周辺で宗教儀式が執り行われた可能性が指摘されている。おそらくはアルゴスによる侵攻が間近に迫ったことによる不安や恐怖心を静め、安全を祈願する目的があったと推察されよう⁴⁷。かかる事例は初期鉄器時代後期の宗教行為においてもポリスの成立とは背景を異にするものが存在したことをうかがわせている。

そしてミケーネという場が聖地と見なされるようになったことも、その一つである。初期鉄器時代後期におけるミケーネの聖地化は、当該期の宗教や信仰、さらには社会の大きなうねりの一要素として少なからず重視されてよい現象である⁴⁸。

1 初期鉄器時代のミケーネの墓に関しては、高橋2020を参照。

2 French 2002, 141.

3 Mylonas 1972, Wardle 2015. Cf. Rutkowski 1986, 175-182, Marakas 2010, 50-55, Aamont 2008.

4 ミケーネ時代のミケーネにおける宗教施設に関する文献として、Pliatsika 2015.

5 Klein 1997. Cf. Klein 2002.

6 Klein 1997, 279, 312-315 (Pottery Lot no.34). 他にも原幾何学文様期の土器片が出土しているが (Klein 1997, 300-301, Pottery lot no.8, 12.Bowl)、これも原位置を保っていたとは思われない (Klein 1997, 260-261)。ただし、原幾何学文様期から聖域であったと考える研究者も存在する (Hall 1995, 599)。

- 7 現今の資料状況から確認されるところでは、ミケーネでは重ミケーネ期と原幾何学文様期においては城壁の内側にも墓が造営されたのに対して、それ以降は城壁の外側が選択されるようになる（高橋2020, 121-122）。おそらくはアクロポリスの意味合いが変化した結果であると推測され、その帰結として初期鉄器時代の終わりに頂上一帯で宗教活動が展開されるようになったとも解釈されよう。
- 8 Klein 1997, 288.
- 9 Klein 1997, 292.
- 10 Klein 1997, 297.
- 11 *PAE 1966*, 1968, 113. Cf. Antonaccio 1995, 53.
- 12 *PAE 1951*, 1952, 196, *PAE 1965*, 1967, 95-96, *PAE 1966*, 1968, 111-114. 碑文に関して, Mitsos 1946. さらに, S.N. Koumanoudis, *Néon Athínaion* III, 1958-1960, 16 (筆者未見)、cf. Andreadi ed. 2003, 39). また参考文献として、Antonaccio 1995, 53, Mazarakis Ainian 1997, 320, French 2002, 141, Andreadi ed. 2003, 39.
- 13 神殿の建造年代は前5世紀初頭と推測されている（Andreadi ed. 2003, 39）。
- 14 *PAE 1966*, 1968, 113-114. Cf. Mazarakis Ainian 1997, 320.
- 15 French 2002, 141, Andreadi ed. 2003, 40 (C3:05). これら二つの文献ではこの場所の発掘に関しては未報告と記されており（French 2002, 141, Andreadi ed. 2003, 26）、管見の限りにおいてはその後も報告が出された形跡はない。
- 16 French 2002, 141.
- 17 Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 9-15, Wace, Pakenham-Walsh, Taylour, Woodhead, Desborough & Taylor 1955, 184-185, *Ergon 1962*, 1963, 106-108, *PAE 1962*, 1966, 81-88, Tournavistou 1995.
- 18 *Ergon 1963*, 1964, 77-79, *PAE 1963*, 1966, 110-112.
- 19 *Ergon 1962*, 1963, 106-108, *PAE 1962*, 1966, 85-87. Cf. Mazarkis Ainian 1997, 67-68.
- 20 Mazarakis Ainian 1997, 68.
- 21 *PAE 1962*, 1966, 85-87.
- 22 *PAE 1963*, 1966, 111.
- 23 この周辺における初期鉄器時代の墓に関しては、高橋2020, 134-137頁。
- 24 原幾何学文様期から聖域であったと記す文献も存在する（Andreadi ed. 2003, 26）。ただし別の箇所では原幾何学文様期に関しては土器片が出土しているだけで、聖域としての使用は幾何学文様期以降という解釈が提示されている（Andreadi ed. 2003, 53）。
- 25 Hägg 1992, 16.
- 26 *Ergon 1962*, 1963, 108.
- 27 Mazarakis Ainian 1997, 68, 320.
- 28 Cook 1953, 112.
- 29 発掘報告は、Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 30-93. 参考文献として、Hägg 1987, 96-99, Moragan & Whitelaw 1991, 89-90, Antonaccio 1995, 147-152, 248, Hall 1995, 601-602, Andreadi ed. 2003, 58.
- 30 Wace, Woodhead, Cook & Hood 1953, 64, “J. Cult Inscriptions, no.1”.
- 31 文字が刻された土器片の中にはそれよりも早い年代と推測されるものも含まれていたが、わずかに二文字が残されているだけで何が記されていたのか復元することは不可能であ

- ろう (Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 64, “J. Cult Inscriptions, no.2”).
- 32 前古典期とヘレニズム時代の瓦が出土している (Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 66)。
- 33 Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 33.
- 34 土器以外の遺物としては土製像があるかもしれない。この場所からは多数の小型土製像が発見されており、その中に後期幾何学文様期のものが含まれている可能性はあろう (Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 62-64)。
- 35 とりわけNo.33は前7世紀末、no.34はそれよりも後の時期と報告されている (Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 40)。
- 36 コールドストリームはこの遺跡から出土した高脚のクラテルを後期幾何学文様期ではなく垂幾何学文様期と分類している (Coldstream 2008, 146-147)。とすると、時期が下ることになる。
- 37 後期青銅器時代III期の土器は出土しているが (Wace, Holland, Hood, Woodhead & Cook 1953, 30)、垂ミケーネ期から中期幾何学文様期にかけての遺物は報告されていない。
- 38 この問題に関しては、cf. Morgan & Whitelaw 1991, 89, Antonaccio 1995, 150-151. またこの聖域の早い時期に関してヘラの信仰を推測する意見として、Marinatos 1953, 87.
- 39 高橋2015、80頁。
- 40 Antonaccio 1995, 30-53.
- 41 例えばアッティカに関しては、高橋2001、52-53頁。さらに関連文献として、高橋2011、121-125頁。
- 42 *PAE 1953*, 1956, 207-209, Mylonas 1973, 18-19. さらに、cf. Antonaccio 1993, 50, 53.
- 43 Mylonas 1957, 171, Hägg 1983, 191, Hägg 1992, 16-17, Antonaccio 1995, 47-48, Mazarakis Ainian 1997, 122, 320. ただし、French 2002, 141.
- 44 フレンチは初期鉄器時代に幾つもの聖域が造られるようになったこととホメロスの叙事詩が広まったこととの関係は不明であると記しており (French 2002, 141)、筆者もそれに同感である。ただし“伝説や神話にまつわる故地”に聖域が設けられることがあり (浦野2017、14)、それに類する事例であると思われる。
- 45 もしも筆者の仮説が正鵠を射るものであるならば、エニユアリオス (アレス) の聖域は聖地の北端に、そしてカオス川付近の聖域 (アガメムノネイオン) は南端に位置し、それぞれ聖なる土地の境界を示すと同時にそこへの出入り口としての役割を担っていたのかもしれない。
- 46 前古典期の資料であるが、円形墓域A周辺からは英雄の所有物であると刻された土器片が見つかった (Cf. Antonaccio 1995, 51)。従って城塞内部においても別種の崇拜や信仰の在り方も存在したと思われる。
- 47 高橋2017、123-125頁。
- 48 註44に記した通り、これがホメロスの叙事詩と関連があるか否かに関しては、可能性は否定できないが、不明と言わざるを得ない (French 2002, 141)。上記のようにアガメムノネイオンにおいてアガメムノンが信仰の対象とされたことが確認しうるのは後代になってからであり、初期鉄器時代においてもそうであったか否かは不明である。

付記

本稿は元々『西洋史研究』（西洋史研究会、仙台）に投稿した原稿に修正や変更を加えたものであり、大筋や結論に相違はない。『西洋史研究』の査読結果（『西洋史研究』編集委員会、2022年7月8日）には誤りや深刻な問題点などが散見されたが、掲載が認められなかったため筆者の意見を述べる機会が与えられなかった。他の読者からも同様の指摘がある可能性もあるので、看過しえない事柄に関して若干のことを記しておきたい（以下、査読者とは『西洋史研究』の上記の査読の担当者を指す）。

①初期鉄器時代のミケーネの集落形態

査読コメントによれば査読者が初期鉄器時代のミケーネを都市であり、なおかつ市壁で囲まれていると見なしていることが推し量られる。しかし当該期のミケーネの集落は都市と見なせる居住地ではなく、また集落全体が周壁で囲まれていたことも確認されていない。

本稿冒頭において記したように初期鉄器時代のミケーネはミケーネ時代とは比肩できないほどに遺構が少なく、住居址は発見されていない¹。したがって家屋がどこにあったのか、居住の規模や集落形態はいかなるものであったのかなどに関しては不明である。当然のことながら、この時代の居住地が周壁で囲まれていたことを示す資料も出土してはいない。

住居址が発見されていないにもかかわらず初期鉄器時代においてもこの一帯に人々が居住していたと考えられる理由は、当該期の墓が出土しているからである。ただしそれも数は多くはなく、繁栄していたとは判断できない。アルゴスやアシネ、ティリンスなど同時代のアルゴリスの他集落と墓数を比較しても、ミケーネは弱小集落に過ぎなかったことは明らかである。ましてや都市と表現するには程遠い状況にあった。

②“聖地”および“聖地化”という用語について

タイトルの“聖地”という言葉が問題とされたので、それについて記しておく必要がある。

第1章および第2章にて記したように、初期鉄器時代の後期にミケーネにおいては複数の聖域が造営され、それはミケーネという地域全体が聖なる場所、すなわち“聖地”、と見なされたからであると筆者は考えている。本稿においては、ミケーネの集落周辺一帯が“聖地”と見なされたことを“聖地化”と表

現している（誤解がないように記しておくが、ミケーネの地域全体が一つの聖域となったという意見ではない）。

③ポンペイおよびローマ市に関する記載について

第2章の最初の段落における「ミケーネにおいてはアクロポリス頂上部よりも、その周辺の道沿いの聖域の方が先に発展し、また整備されたと判断される。これはポリス成立期におけるミケーネの宗教的要素における大きな特徴である」という記載に関して、査読者はポンペイを引き合いに出して下記のような意見を述べている。「例えばポンペイにおいても、同様の特徴が看取される。なぜならば、都市は市壁で囲まれているため、面積に限界があり、その結果、市壁内に墓を作らなかったし、作ることを禁じていたにすぎないのではないか。これはローマ市のみならず、どこでも同じであったはずである。」

このコメントに関しては一切理解することができない。意味をなしていないのみならず、本稿の内容が把握されていないことが端的に示されている。なぜならば問題とされた箇所においてもそれ以外においても、本稿では初期鉄器時代のミケーネの集落に関して墓が市壁内に作られたか否かについて言及している箇所はないからである。そもそも上記のように（付記①）、この時代のミケーネには集落を囲む周壁の存在は確認されておらず、さらに遡ってミケーネ時代においてもそれは同様であった。なぜ唐突に市壁内に墓が作られたのか否かが問題とされたのかは全くもって不明である。

市壁は存在しなかったがアクロポリスには城塞を囲むミケーネ時代の城壁があったのでそれとの関係を記しておく、城壁の内側から亜ミケーネ期と原幾何学文様期、すなわち初期鉄器時代の前半期の墓が発見されている。ミケーネ文化の崩壊に伴いアクロポリスに存在したミケーネ時代の多くの建造物が廃墟と化し、初期鉄器時代前半期においてはそれらの廃墟に墓が作られた。これに対して初期鉄器時代の後半になると、墓を作る場所は城壁の外側が選択されるようになる²（強調しておくが、アクロポリスにおけるミケーネ時代の城壁の外側ということはミケーネの集落の外側ということではない）。そしてこのような変化は、ミケーネ一帯が聖なる地と認識されるに伴って、そのアクロポリスに関して神聖な場所という新たな意味合いや価値観が醸成され、初期鉄器時代の後半期には埋葬地として使用することが避けられるようになった結果であると筆者は考えている。

次にイタリア半島のポンペイやローマ市に関して言えば、ギリシアの初期鉄

器時代におけるミケーネの集落との直接的な比較や検討は不可能である。ポンペイは火山の噴火により都市全体が埋没したことにより当時の景観がそのまま残された稀有な遺跡として有名であるが、その噴火が発生したのは後79年である。すなわちギリシアの初期鉄器時代（前11～8世紀）とは1000年前後の開きがある。そして政治的にも社会的にもその様相は全く異なる。ギリシアの初期鉄器時代においては、その後期にポリス（都市国家）が成立したと一般に考えられてはいるが、通時的に政治や行政のシステムは未だ十分には発達（もしくは存在）しておらず、帝政期であれ共和政期であれ古代ローマの社会とは著しく異質な世界である。時期的にはより近い王政期の社会であっても、ギリシアの初期鉄器時代とは同一ないしは同質ではありえまい。

初期鉄器時代のミケーネには、ポンペイのような直線的な道路も人工的に整えられた街区も公共施設も市壁も存在しない。この時代のミケーネに関して意見を述べるに際して、その資料状況を無視して、時間的にも地理的にも社会的にも隔たりがあるポンペイやローマ市の知見に依拠することは論外である。

④初期鉄器時代における宗教

「おわりに」において記載されている「この頃の宗教や信仰およびその儀式の在り方は必ずしも一様ではなく」という点に関して、査読者は「本稿の内容とは直接的関連がないように思われる」と記しているがそれは誤りである。むしろ本稿にとって重要なポイントである。

初期鉄器時代に関しては宗教関連資料は多くなく、とりわけその前半期に該当するものは稀である。後期になって神殿が建造されるようになると資料が増加し、それが初期鉄器時代における宗教に関する事象として最も注目されてきた事柄であろう³。そして神殿の誕生という宗教的側面における画期的な出来事は、ポリス成立期における政治的变化と関連づけられて議論されることが多い。

これに対して初期鉄器時代後期にミケーネ一帯が聖地と見なされるようになったという現象は、アルゴリスにおけるポリスの成立、すなわちアルゴスが平野を平定してポリスを形成したことやそれに伴うこの頃の政治的問題とは関係がないと筆者は考えている。第2章で記したとおり、ミケーネ時代のトロス墓や横穴墓が初期鉄器時代に入ってから信仰の対象となったが、それが多く存在するミケーネの地全体が特別な場所として認識されるようになったことがミケーネの聖地化の要因と推察している⁴。さらにミケーネの集落はアルゴリスと

コリントスの二つの地域を結ぶルートの要衝に位置しているため道沿いの諸聖域はそこを往来する人々から畏怖の念をもって崇敬されたことは想像に難くなく、特定のポリスのための宗教施設ではなかったと思われる。

かかるミケーネにおける現象は地域全体が聖なる場所と見なされた初期鉄器時代における稀有な事例であり、ポリスの成立に伴う神殿の誕生とは異質な宗教や信仰の存在を示唆している。

⑤ギリシアの初期鉄器時代における資料状況

ミケーネ文化の崩壊に伴い線文字Bが使用されなくなると、ギリシアでは文字が使用されなくなり、初期鉄器時代の後期にアルファベットが誕生するまでの数世紀にわたって無文字世界となる⁵。後期幾何学文様期に関してはアルファベットが刻まれた土器も発見されているが、後代のような豊富な知見を得られる文字史料は存在しない。

したがって初期鉄器時代に関しては事実上考古資料しか存在しないが、それも埋葬資料が占める比重が大きく、偏りが激しい。住居址をはじめ建築遺構は多くはなく、神殿も前8世紀にいたるまでは建造されなかった。さらには社会を読み解く上で有益な分析対象となる貨幣やポンペイのような壁画もない。すなわちギリシアの初期鉄器時代に関しては限られた物質資料しか存在しないのである。

物質資料にはその固有の特徴があり、それから得られる情報は文字史料とは異なる。また文字史料のような詳細な検討は不可能なこともあれば、推測に頼らざるを得ないこともある。査読者はおそらく文字史料が豊富なローマ社会を念頭に意見を述べている可能性が高いと推察されるが、ギリシアの初期鉄器時代はそれとは資料状況が大きく異なる。その時代や地域ごとの資料傾向や特性は考慮される必要があろう。

-
- 1 初期鉄器時代の遺跡においては一般に住居址よりも墓の方が多く発見されている。ミケーネの集落も同様である。
 - 2 高橋2020、121-122。また後期青銅器時代IIIC期の埋葬に関しては、高橋2015、79-86。
 - 3 ただし、初期鉄器時代に関する神殿以外の宗教資料として洞窟聖所がある。
 - 4 本論の註44と48で記したように、もしかしたらホメロスの叙事詩との関連があるかもしれないが、それを直接的に証拠づける資料は存在しない。
 - 5 高橋2022、25、28。

略記一覧

- AJA *American Journal of Archaeology*
 BCH *Bulletin de correspondance hellénique*
 BSA *Annual of the British School at Athens*
 Ergon *Το Έργον της Αρχαιολογικής Εταιρείας*
 PAE *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας*

参考文献

- Aamont, C. 2008: Mycenaean Cult Practice: ‘Private’ and ‘Public’ Ritual Acts, in C. Gallou, M. Georgiadis & G.M. Muskett eds., *Dioskouroi: Studies presented to W.G. Cavanagh and C.B. Mee on the Anniversary of their 30-Year Joint Contribution to Aegean Archaeology*, BAR International Series 1889, Oxford, 30-41.
- Andreadi, E. ed. 2003: *Archaeological Atlas of Mycenae*, The Archaeological Society at Athens Library no.229, Athens.
- Antonaccio, C.M. 1993: The Archaeology of Ancestors, in C. Dougherty & L. Kurke eds., *Cultural Poetics in Archaic Greece: Cult, Performance, Politics*, Cambridge, 46-70.
- 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Lanham & London.
- Coldstream, J.N. 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, updated second edition, Bristol.
- Cook, J.M. 1953: The Cult of Agamemnon at Mycenae, in *Γέρας Αντωνίου Κεραμοπούλλου*, Athens, 112-118.
- Foley, A. 1988: *The Argolid 800-600 B.C.: An Archaeological Survey — Together with an Index of sites from the Neolithic to the Roman Period*, Göteborg.
- French, E. 2002: *Mycenae: Agamemnon's Capital — The Site in its Setting*, Stroud & Charleston.
- Hägg, R. 1983: Funerary Meals in the Geometric Necropolis at Asine?, in R. Hägg ed., *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.: Tradition and Innovation — Proceedings of the Second International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 1-5 June, 1981*, Stockholm, 189-194.
- 1987: Gifts to the Heroes in Geometric and Archaic Greece, in T. Linders & G. Nordquist eds., *Gifts to the Gods: Proceedings of the Uppsala Symposium 1985*, Boreas 15, Uppsala, 93-99.
- 1992: Geometric Sanctuaries in the Argolid, in M. Piérart ed., *Polydipsion Argos: Argos de la fin des palais mycéniens à la constitution de l'État classique*, BCH Supplément XXII, Paris, 9-23.
- Hall, J.M. 1995: How Argive was the “Argive” Heraion? The Political and Cultic Geography of the Argive Plain, 900-400 B.C., *AJA* 99, 577-613.
- Klein, N.L. 1997: Excavation of the Greek Temples at Mycenae by the British School at Athens, *BSA* 92, 247-322.
- 2002: Evidence for the Archaic and Hellenistic Temples at Mycenae, in R. Hägg

- ed., *Peloponnesian Sanctuaries and Cults: Proceedings of the Ninth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June 1994*, Stockholm, 99-105.
- Marakas, G. 2010: *Ritual Practice between the Late Bronze Age and Protogeometric Periods of Greece*, BAR International Series 2145, Oxford.
- Marinatos, S. 1953: Περί τους Νέους Βασιλικούς Τάφους των Μυκηνών, in *Γέρας Αντωνίου Κεραμοπούλλου*, Athens, 54-88.
- Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Ion Age Greece (1100-700 B.C.)*, Studies in Mediterranean Archaeology CXXI, Jonsered.
- Mitsos, M.T. 1946: An Inscription from Mycenae, *Hesperia* 15, 115-119.
- Morgan, C. & T. Whitelaw 1991: Pots and Politics: Ceramic Evidence for the Rise of the Argive State, *AJA* 95, 79-108.
- Mylonas, G.E. (Γ.Ε. Μυλωνάς) 1957: *Ancient Mycenae: The Capital City of Agamemnon*, Princeton.
- 1972: *Το Θρησκευτικόν Κέντρον των Μυκηνών*, Αθήνα.
- 1973: *Ο Ταφικός Κύκλος Β των Μυκηνών*, Αθήνα.
- Pliatsika, V. 2015: Tales of the Unexpected: Identifying Cult Practice in the House M Quarter of the Mycenae Citadel, in Schallin & Tournavitu eds. 2015, 597-612.
- Rutkowski, B. 1986: *The Cult Places of the Aegean*, New Haven & London.
- Schallin, A.-L. & I. Tournavitu eds. 2015: *Mycenaeans up to Date: The Archaeology of the North-eastern Peloponnese — Current Concepts and New Directions*, Stockholm.
- Tournavitu, I. 1995: *The 'Ivory Houses' at Mycenae*, The British School at Athens Supplementary Volume no.24, London.
- Wace, A.J.B., M. Pakenham-Walsh, L.W. Taylour, A.G. Woodhead, V.R.d'A. Desborough & H. Taylor 1955: Mycenae 1939-1954, *BSA* 50, 175-250.
- Wace, A.J.B., M. Holland, M.S.F. Hood, A.G. Woodhead & J.M. Cook 1953: Mycenae 1939-1952, *BSA* 48, 3-93.
- Wardle, K.A. 2015: Reshaping the Past: Where was the “Cult Centre” at Mycenae?, in Schallin & Tournavitu eds. 2015, 577-596.
- 浦野聡2017:「古代地中海聖域の精神的・身体的トポグラフィー」、浦野聡編『古代地中海世界の聖域と社会』勉誠出版、1-45頁。
- 高橋裕子2001:「初期鉄器時代におけるアテネとアッティカ」『史学雑誌』第110編第11号、36-61頁。
- 2011:「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（1）アテネのアゴラ」『史苑』第72巻第1号、99-160頁。
- 2015:「青銅器時代終末期におけるミケーネ」『西洋史研究』新輯第44号、75-90頁。
- 2017:「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（3）アシネ」『マテシス・ウニウェルサリス』第19巻第1号、107-137頁。
- 2020:「初期鉄器時代のミケーネ — 埋葬資料の検討」『史苑』第81巻第1号、117-140頁。
- 2022:「ギリシアの初期鉄器時代 — 青銅器時代終末期以来の社会変動と対外関係」『古代文化』第74巻第1号、24-36頁。